先人の知恵と勇気を子や孫の世代に

～立岩さんが残したのもの

母里啓子さんの資料から

「生きて存る」を学ぶ

2024年12月16日（月）

立命館大学生存学研究所　トークセッション

コンシューマネット・ジャパン

古賀　真子

生存学研究所とのご縁

- 資料は母里啓子さんの自宅に保管されていた膨大な書籍、論文集等です。急逝されたために有志で保管場所を探し、生存学研究所にひき受けていただけることになりました。
- 2022年7月31日、生存学研究所で立岩さんに引き受けのお礼のご挨拶に伺いました。
- 概要（おおまかな作成時期、ノート・ファイル・チラシ・電子媒体といった種類の傾向など）は栗原敦さんから説明いただきます。
- 立岩先生と面談された際のお話しの内容、先生の印象
- 「予防接種は誰のため？」感染症への恐れ、人類の歴史、医療の発達の光と影。予防接種は生存のための知恵、個人の福利をもたらす反面、副作用である死亡や障害の発生等が不可避です。社会的な対応はあまりにもお粗末です。
- 病や老い、障害とともに生きることから社会を考察する「生存学」の礎を築いた生存学研究の範疇において、予防接種は誰のためかを問い続けた母里啓子さんの活動とその蔵書は次世代に引き継いでいくべき遺産です。

出生から幼年期　戦争体験
（以下　戸塚美奈さんの年譜まとめより）

- **1934年**（S９）９月22日、吉田康三、トシ夫妻の次女として東京都渋谷区金王町四一番地で生まれる　＊
- **1935年、米のスタンリーがウイルスの結晶化に成功**
- **1940年**　6月10日、実践女学校付属幼稚園入園。
- **1941年**　4月、東京都渋谷区常磐松国民学校へ入学
- **1944年**　3月、宮城県仙台市へ移住。宮城師範学校男子部附属国民学校へ
- **1945年**　3月、渋谷へ戻った後、南多摩郡南村へ疎開
- **1945年**　4月、東京都南多摩郡南村国民学校へ
- **1945年8月、日本ポツダム宣言受諾**
- **1945年**　10月、焼け野原の渋谷へ戻る。渋谷区常磐松国民学校へ
- **1947年**　5月、東京都渋谷区鉢山中学校入学
- **1947年6月、予防接種法公布**
- **1947年11月、京都・島根ジフテリア予防接種禍事件**

青年期　医学部を志す

- **1950年**　4月、お茶の水女子大学東京女子高等師範学校文教育学部付属高等学校へ入学
- **1950年**　6月、腎臓炎のため翌年4月まで休学
- **1954年**　4月、千葉大学文理学部医学部入学
- **1955年**　1月30日、母トシ死去
- **1957年**　千葉大学の細菌学教室に遊びに行き、波田野基一のジフテリアの毒素産生研究の手伝いをする。検体を千葉から自宅近くの目黒の国立予防衛生研究所（予研）の黒川正身のところへ運んだ。本来無害であった細菌が有害になるのはバクテリオファージ、つまり細菌にとりついたウイルスのせい。これがウイルスというものに興味をもつ一番最初のきっかけとなった
- **1960年**　臨床医になるつもりはなく、インターンの期間は東京大学理学部生物化学教室の江上不二夫研究室に潜り込み、蛋白質、核酸、酵素の実験の手ほどきを受ける。研究室では遺伝子情報が二重らせんの上にあるという最先端の情報でわいており、医学部生化学教室とのギャップに驚く
- **1960年、ポリオ大流行**

感染症への道程
臨床でなく研究職（ウイルス学）

- **1961年**　5月16日、医師免許取得
- **1961年**　6月12日、腸チフス、パラチフスの集団接種のアルバイト。日本体育大学の学生500人に次々と接種
- **1961年**　東大伝染病研究所（現 東大医科学研究所）で免疫学者の野島徳吉に師事し、日本脳炎の発病病理などを研究テーマとする。千葉大学大学院に籍を置き、4年間伝染病研究所で研究に打ち込む
- **1962年**　日本脳炎ウイルスを電子顕微鏡で撮影することに成功する。「日本脳炎ウイルス（中山株）の精製について」野島徳吉,美濃部侑三,高橋千代,吉田啓子『最新医学』,17：2026
- **1962年**　9月2日、母里知之と結婚
- **1964年**　『ウイルス』一四巻に「ハツカネズミ脳組織より抽出した日本脳炎ウイルスレセプターの精製，およびその2，3の性質」を掲載。https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsv1958/14/3-4/14_3-4_111/_article/-char/ja/　プロフィール欄の記載は「千葉大学医学部細菌学教室（主任　川喜田愛郎教授）東京大学伝染病研究所第１ウイルス部（指導　野島徳吉講師）」
- **1965年**　3月、千葉大学大学院医学研究科微生物学修了、医学博士取得

がん研究の時代

- **1965年**　4月、名古屋市に転居。愛知県がんセンター研究所・生化学部研究員として、がんウイルスへの生化学的アプローチなどを研究
- **1970年**　6月23日、カナダ・トロント大学のがん研究所へ留学
- **1970年、種痘禍社会問題となる**
- **1972年**　7月1日、帰国
- **1972年10月、ワクチン禍研究会（代表吉原賢二）『ワクチン禍研究』創刊**
- **1973年、予防接種禍東京訴訟起こる**

ワクチン禍との出会い

- **1973年**　Mori H.・Howatson A.F.（1973）.Intervirology,1168－175.In vitro Transcriptase Activity of Vesicular Stomatitis Virus B and T Particles: Analysis of Product　https://www.karger.com/Article/Abstract/148843
- **1974年**　12月6日、父康三死去
- **1975年**　3月22日、母里知之の転職に伴い、名古屋から神奈川県へ
- **1975年**　4月、東京都がん検診センター臨床検査部に勤務。ここで東京都臨床医学研究所のB型肝炎研究グループと知り合う。これが、横浜市衛生研究所でのB型肝炎ウイルス母子間感染防止事業へとつながっていく
- **1975年12月、『私憤から公憤へ|社会問題としてのワクチン禍』吉原賢二（岩波書店）刊行**
- **1976年　6月、予防接種法改正（法的救済制度明記、罰則の廃止、インフルエンザワクチン臨時義務に）**
- **1976年**　7月1日より横浜市衛生研究所細菌課に勤務。冬期はインフルエンザウイルスの分離、感染確認の血清検査に追われる
- **1977年6月、和歌山県有田市でコレラ発生**
- **1978年**　4月～6月、鶴見川流域でコレラ菌汚染が確認される。横浜市衛生研究所の細菌課長として水系の消毒を行う

実務家として
B型肝炎研究と母子感染防止事業に寄与

- **1984年**　小児科臨床第37巻第9号昭和59年9月『HBIGおよびHBワクチン併用によるHBウイルス母子間感染予防の経験』掲載。昭和55年12月～58年8月、横浜市内病院の協力を得て、抗HBsヒト免疫グロブリン、HBワクチンの併用によるHBウイルス感染予防プログラムを実施。母子間垂直感染と出生後の水平感染を予防し、新たなキャリアー発生を高率に防止することに成功
- **1985年**　1月、国立公衆衛生院・疫学部急性感染症室長となる
- **1985年**　B型肝炎母子間感染予防事業の功績により、医学研究学術賞を受賞（朝日新聞厚生文化事業団）。群馬県衛生公害研究所所長の氏家淳雄を中心とした地方衛生研究所インフルエンザ疫学研究会に第二回目より参加。それ以降、前橋市のインフルエンザワクチン効果に関する研究班にも参加する
- **1985年**　横浜市における妊婦のHB s 抗体保有率の経年推移—感染率の減少についてー」野口有三,母里啓子,津田忠美『日本公衆衛生雑誌』第32巻
- **1985年**　6月より、厚生省「B型肝炎母子感染防止事業」が世界に先駆けて全国で開始される。この結果、一九八六年以降に出生した集団における小児期のHBs抗原陽性率は0・02～0・06%まで激減した

B型肝炎・MMR問題への対応～国の感染症対策へのアンチテーゼ

- **1988年**　2月28日発行日本臨牀第46巻増刊号肝胆疾患に『B型肝炎の疫学的事項』『B型肝炎ウイルスの感染経路』掲載。「わが国のB型肝炎は社会全体としてみればワクチンの開発以前にはほとんど制御されており，現在は以前のつけを払わされている状況であり，安易に扱ってはならないという教訓と同時に，感染様式のわからない時代と同じではないということを知らねばならない『B型肝炎の疫学的事項』」
- **1889年**　5月、公衆衛生院の組織機構改正が行われ、急性感染症室と慢性感染症室が廃され、感染症室と環境疫学室が置かれた。感染症室長となる
- **1989年、MMRワクチンの導入**
- **1989年**　学校現場でB型肝炎流行が問題になったことから、里見宏の紹介で日教組養護教員部とつながりができる。

インフルエンザ予防接種懐疑論

- **1980年2月、前年に来日した米CDCの調査団が、日本のインフルエンザワクチンの学校での集団接種効果**
- **なしとする報告書を出す（Influenza Immunization Policies and practices in Japan）**
- **1980年3月、「病原微生物検出情報月報」（Infectious Agents Surveillance Report, IASR）スタート**
- **1980年**　IASR（病原微生物検出情報）Vol.1に「B型肝炎ウイルス母子間感染の実態」を掲載http://idsc.nih.go.jp/iasr/CD-ROM/records/01/00803.htm
- **1981年**　横浜市全体の小中学校のインフルエンザ予防接種率と学級閉鎖の間の関係を過去10年にわたって調べ、相関がないことを明らかにする
- **1981年**　6月20日、日本ウイルス学会『インフルエンザワクチンに関するRoundTableDiscussion』に参加。予研の大谷明、東海大の木村三生夫、東北大の石田名香雄らが参加。この席で横浜市衛研より「社会医学の立場から」として発表。「10年間の15保健所管内（中略）の無作為抽出820名についての調査ではワクチン接種歴による罹患率の差は認められず，症状，発熱状況についても軽減はみとめられなかった．ウイルス分離成績は明らかに予防接種歴を有するものが高く，むしろ集団の中にまき散らしていると考えられる」
- **1982年**　「長期にわたり横浜市という大都市を単位として見た場合、予防接種の接種率による防衛効果の違いはない」「現行の学童集団接種による社会防衛論は、学校における集団カゼ発生防止の立場からも、効果があるとは認められない」と結論づける『最近3年間の横浜市におけるインフルエンザ流行』遠藤貞郎,小島基義,野村泰弘,母里啓子『横浜市衛生研究所年報』21号115－119ｐ

市民運動に参加～
前橋レポートを原点として

- 1985年8月、予防接種についての市民運動の原点となる「どうする予防接種|全国シンポジウム|親、子、医師、研究者で考える集い」静岡開催に足を運ぶ
- **1986年、前橋市医師会が前橋レポート提出**
- **1987年1月、前橋市インフルエンザ研究班編「ワクチン非接種地域におけるインフルエンザ流行状況」刊行**
- **1987年2月、インフルエンザ全国ネットワーク発足**
- **1987年6月、厚労省研究班による報告「集団免疫効果について確実に判断できるほどの十分な研究データはない**

日教組とワクチントーク

- **1989年**　学校現場でB型肝炎流行が問題になったことから、里見宏の紹介で日教組養護教員部とつながりができる。
- **1989年**　8月、日教組養護教員部研究集会第29回目に参加。記念講演「インフルエンザ予防とは何か」。初めて日教組で講演を行う。この年以降も、日教組養護教員部の研究集会の研究協力者として参加。共同研究者として日教組の健康白書運動にもかかわる。さらに、各県養護教員部で講演を行うことになる
- **1990年**　4月、公衆衛生院付属図書館長に任命され、感染症室長を併任
- **1990年**　「インフルエンザ流行と社会医学」母里啓子、福富和夫『社会医学研究』第9号
- **1990年**　7月、カナダ・モントリオールで国際感染症学会に参加
- **1990年**　8月、子どものためのワクチントーク全国発足（毛利子来、黒部信一、藤井俊介、青野典子）
- **1990年**　10月、カナダ健康保健省のウイルス製造部門の責任者であるコントレラスよりMMRワクチン占部株の無菌性髄膜炎についての問い合わせのファックスが入る。英文の報告書はなく、即日、前橋市医師会による「MMRワクチンが原因と思われる無菌性髄膜炎について」（日本医事新報No.3441p43）を送付。カナダは12月には占部株のライセンス取り消しと販売停止に踏み切った
- **1991年**　10月30、31日、WHOとカナダ政府によるワクチン副作用情報を集める基準のための会議に招待され、出席（Workshop on the Standardization of Definitions for post-Marketing Surveillance of Adverse Vaccine Reactions

市民運動へ

- **1992年**　11月、ワクチントーク全国大会厚木集会で講師をつとめる
- **1992年12月、予防接種禍東京訴訟、国の敗訴**
- **1993年**　「日頃の欠席率を考慮したインフルエンザワクチンの効果に関する研究」飯住英幸,母里啓子,丹後俊郎『日本公衆衛生雑誌』40号　養護教員の協力のもと、17614人を対象として流行期の欠席状況を流行期以外の欠席状況と同時に調査。「インフルエンザによる欠席日数は、普段の欠席状況との相関が強く、ワクチンを2回接種できる子は普段も休まない子であり交絡因子として考え調整する必要があり、その結果は殆ど効果はないといえます」前橋市医師会医学講演集録「インフルエンザワクチンを中心に，感染症の現状など」講演より
- **1993年**　4月1日、瀬谷保健所に保健所長として勤務
- **1993年4月、MMRワクチンの中止**

情報発信者として

- **1993年**　11月、里見宏の紹介で『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』（ジャパンマシニスト社：松田博美）の編集委員となる。『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』No.1刊行される。特集は「予防接種はどれをどう受けますか?」。「新米保健所所長のひとりごと」の連載もスタート
- **1994年**　1月31日、厚労省から通達「平成六年度における一般的臨時予防接種としてのインフルエンザ及びワイル病の予防接種については、その実施を見合わせられたい」が出される
- **1994年、予防接種法改正（義務↓努力へ。公衆衛生から個人への勧奨へ）**
- **1994年**　小児内科第26巻第11号に『予防接種被害とその対策』掲載。予防接種禍の四大裁判の裁判記録から症例の一覧を作成して掲載　＊

保健所長と本の出版

- **1995年**　4月、ちいさい・おおきい・よわい・つよいブックレット1『厚生省『予防接種と子どもの健康』攻略本」予防接種制度検討市民委員会・ワクチントーク全国編（ジャパンマシニスト社）刊行
- **1995年**　6月、戸塚保健所に保健所長として勤務
- **1996年**　8月、ちいさい・おおきい・よわい・つよいブックレット8『学校から予防接種が消えた』草野喜久恵と共著（ジャパンマシニスト社）刊行
- **1996年7月、大阪県堺市でO-157集団発生**
- **1996年**　12月、ちいさい・おおきい・よわい・つよいブックレット10『知りたい　食中毒と伝染病　うつる病気はなぜこわいのか』里見宏と共著（ジャパンマシニスト社）刊行
- 1997年、香港高病原性鳥インフルエンザ（H5N1）発生、世界初の人感染事例となる
- **1997年**　12月、ちいさい・おおきい・よわい・つよいブックレット11『知りたいインフルエンザその正体と予防接種の効きめ』（ジャパンマシニスト社）刊行
- **1998年**　5月、旭保健所に保健所長として勤務
- **1998年**　前年に前橋市医師会が保健文化賞受賞（「予防接種および流行性疾患についての実践的な研究により国民の健康保持に貢献」）。受賞記念講演会が開催される。「インフルエンザワクチンを中心に、感染症の現状など」を講演
- **1998年**　9月、日本応用心理学会大会の公開シンポジウム「予防接種被害と応用心理学」に参加
- **1998年4月1日、感染症法の施行に伴い、100年以上続いた伝染病予防法が廃止される**
- **2000年**　3月、退職

老健施設長として

- **2000年**　「インフルエンザワクチンは誰のため？」『公衆衛生』第64巻第10号
- **2000年**　12月、雑誌『世界』（岩波書店）一二月号で岡部信彦と対談。「インフルエンザ予防接種打つべきか打たざるべきか」
- **2001年**　4月、介護老人保健施設　やよい台「仁」施設長となる
- **2001年**　9月8日、MMR訴訟で、原告・弁護団の求めに応じ、大阪地方裁判所へ意見書を提出
- **2001年9月、米で同時多発テロ事件**
- **2001年11月、予防接種法改正（対象疾患に区分。インフルエンザ予防接種高齢者公費負担始まる）**
- **2001年　中国で重症急性呼吸器症候群（SARS）発生が報告される**
- **2003年**　9月、やよい台「仁」にて「入居者ならびにご家族の皆さまへ|インフルエンザ予防接種についての私の考え」を配布
- **2003年**　12月、『医者には聞けないインフルエンザ・ワクチンと薬』監修（ジャパンマシニスト社）刊行
- **2004年**　3月、やよい台「仁」退職
- **2004年**　9月、『予防接種へ行く前に　受ける子どもの側にたって』監修（ジャパンマシニスト社）刊行
- **2005年**　10月、『今年はどうする?インフルエンザ疑問だらけの予防接種と特効薬』監修（ジャパンマシニスト社）刊行
- **2006年4月、MRワクチン定期接種に**
- **2007年2月、タミフル服用後の異常行動が問題に**
- **2007年4月、大学ではしか流行のニュース流れる**

インフルエンザ予防接種の情報発信

- **2007年**　12月、『インフルエンザ・ワクチンは打たないで!』（双葉社）刊行
- **2008年**　2月10日、MMR被害児を救援する会最後の集会にて講演（大阪市）
- **2008年**　12月26日、母里知之死去
- **2009年4月、新型インフルエンザ（H1N1）発生**
- **2009年**　9月9日、「新型インフルエンザ市民対策会議」発足。委員長となる。同日厚労省に申し入れ「これほどまでに『かかってはいけない病気』とされ、『国家危機管理』とされた新型インフルエンザ対策は、恐怖の連鎖と過剰な防御思考により、今後ますます人的侵害、社会的混乱と多大な損失を増幅させていくことが懸念されます」
- **2009年**　10月4日、第15回予防接種改革記念の集い開催。最後の集会となる
- **2009年**　10月10日、朝日新聞「私の視点」に「新型インフル ワクチン接種は慎重期して」が掲載される「七千万人への接種は、大規模な人体実験に等しい。接種対象が広がれば、それだけ副反応の被害者は増える。臨床実験の結果を待たずに、妊婦や幼児への接種、季節性と新型の同時接種などを、『問題ない』と言い切るのは危険」
- **2009年**　10月10日、ワールド・ブロガー協会にてワクチン接種の危険性とインフルエンザの誇大宣伝の実態をテーマに取材会開催される。山本英彦医師と共に参加
- **2009年**　12月、『新型インフルエンザ　ワクチン・タミフルは危ない!!!』ワクチントーク全国編（ジャパンマシニスト社）刊行

HPVワクチンはデジャブ

- **2010年**　11月、『必要ですか?子宮頸がんワクチン』ワクチントーク全国編（日本消費者連盟）刊行
- **2010月11月26日、ヒブ、小児用肺炎球菌、HPVワクチンの公費負担始まる**
- 以後、HPVワクチンの審議会を傍聴し古賀真子とともに意見書、厚労省のヒヤリング意見交換、国会議員へに質問主意書、各地での講演会の開催を展開
- **2010年**　12月、『インフルエンザワクチンはいらない』（双葉社）刊行
- **2011年3月11日、東日本大震災**
- **2012年**　12月『地域とからだまなざしを問う』わらじの会「共に生きるための市民福祉講座」記録集
- 2012年より、HPVワクチンを中心に副反応検討部会を傍聴、集会、学習会の開催

コンシューマネットとともに

- **2012年4月1日、ヒブ、小児用肺炎球菌、HPVワクチン定期接種に**
- **2013年**　7月、消費者のための安全安心情報サイト、コンシューマネット・ジャパン発起。理事となる
- **2013年**　10月、『子どもと親のためのワクチン読本』（双葉社）刊行
- **2013年**　11月28日、MMR被害者の審査請求に関する意見書を提出
- **2014年**　9月、『予防接種はだれのため?』（コンシューマネット・ジャパン）電子ブック刊行
- **2014年**　10月、『もうワクチンはやめなさい』（双葉社）刊行
- **2016年**　3月、『それでも受けますか?予防接種　知っておきたい副作用と救済制度』監修（コンシューマネット・ジャパン）刊行
- **2016年**　8月7日、社会学研究第57回日本社会医学総会にコンシューマネット・ジャパン代表の古賀真子と共に参加。演題「予防接種禍と専門家の責任」
- **2017年**　7月、季刊社会運動No.427「ワクチンで子どもは守れるか?」に記事掲載

突然の逝去

- **2019年**　9月29日、『受ける?受けない?予防接種～知っておきたい副作用と救済制度のこと2』監修（コンシューマネット・ジャパン）刊行
- **2020年**　**新型コロナの世界的流行**
- **2020年**　5月、コンシューマネット・ジャパンのサイトにて、zoom学習会「タネまき会」スタート。講師として毎回参加。
- **2020年**　8月23日、インタビュー「ナマケモノ流『コロナ時代の生き方』」がYouTubeで公開される
- **2021年**　5月、『打つ?／打たない?新型コロナワクチン』監修（コンシューマネット・ジャパン）刊行
- **2021年**　6月20日、2021年ワクチントーク北海道全道集会に参加。2019年までの夏の北海道講演ツアー後初
- **2021年**　10月13日秋田県能代市まで友人の空家問題解決のために3泊4日の旅行
- 10月15日、死去（急性動脈乖離）
- 12月26日、日本教育会館にてワクチントーク全国、コンシューマネット・ジャパン共催「母里さんを偲ぶ会」開催される

人となり

- 研究心旺盛、膨大な図書、先進の情報収集
- 積極性、申し入れ、学習会、本の出版
- 本質を見る力（特に感染症・医療関連）
- 世話好き、義侠心（人を信じやすい）
- 柔軟な思考力
- 楽しく啓蒙を生きがい
- 食いしん坊　料理好き（食わせる・飲ませろ）
- 好奇心の塊、なんでも体験したい
- 世代を超えた多くの友人
- ピースボートが生きがい
- おっちょこちょいのところもあり、よく転ぶ

母里啓子的な生き方

- 正しいと思ったことは言い続ける
- おかしいと思えばどこまでも追及する
- 国の公報。マスコミ情報を疑え
- 理不尽さの根源を専門的立場から研究、実践し問い糺す
- 生存の知恵はどんな立場にあっても常に今を見抜き、勇気を持って行動すること
- 人は治るようにできている
- 感染することは悪ではない
- 人はみんな違う
- 薬に依存しない生活

生存学とは

- 「障老病異」(障害、老い、病い、異なり)にある人びとの生きる過程に着目し、これからのあるべき社会を構想し実現を目指す「生存学」。
- 従来の学術研究分野にとらわれない〈学際、複合、新領域〉で、「生」や「生存」をめぐる知に挑む人びと
- 生きとし、生きるものが、生きていることの中で他者への思いやりを忘れず、正義の心を持って生きるための学問
- 立岩さんが次世代に伝えていくべきものを幅広く受け入れていた情熱の原点に触れた3時間
- 予防接種による被害者救済以前に、感染症やワクチンの限界を知らせること。（研究員として）

（蛇足）私のこと

- 22歳の歳の差を超えて
- 連れ合いを亡くされてからの濃密な関係
- 最初は厳しいメンター、最後は育ての母に付き添った　それらの時間の貴重さ
- 人が学んでいき、社会に知恵を還元し、命と健康を守ることの大切さを教わった
- 105歳までは最低生きて欲しかった。母里さんが元気で活躍していることが心の支えだった
- 85歳の壁。人生の過ごし方、人への貢献を「宿題」として残された
- 亡き後3年間を過ごし、改めて本として残していくことの大切さを実感
- （私の趣味仕事）
- 1992.4 日本消費者連盟事務局員。予防接種、フッ素洗口、食品の安全、原発、遺伝子組み換え食品、臓器移植問題、マルチ商法ほか消費者保護法全般担当
- （2006年退職2011年共同代表2013年退任）
- 特定非営利活動法人コンシューマネット・ジャパン設立
- 電力システム改革、予防接種、フッ素洗口、消費者関連法、IT関連問題、不動産トラブル相談
- 消費者の立場から、医療問題、エネルギー問題、消費者関連法制度改革に取り組む。予防接種情報センター全国代表。公正取引委員会消費者アドバイザー、全国消費者団体連絡会理事、ワクチントーク全国事務局。（前内閣府消費者委員会公共料金等専門調査会・家庭用電気料金の値上げ認可申請に関する調査会専門委員・電力託送料金に関する調査会）、カスミリアルエステート代表。立命館大学生存学研究所客員協力研究員
- □□特技等　政策秘書、法務博士、コンシューマーADRエキスパート、行政書士、電気小売りアドバイザー、食品衛生責任者、宅地建物取引士、管理業務主任者　ワインソムリエ

本がつなぐ真実

- 本でしか残せないこと
- 誠心誠意全力で獲得した知恵とノウハウをどう次世代に繋いでいくか
- 生きた足跡が歴史的意義を獲得するにはその後に続く人間の資質が問われている